

『胡琴教録』の「筑民部」は誰か

——長明作者の可能性をめぐって——

今 村 みゑ子

はじめに

以前、鴨長明の音楽活動を探る試みとして、「長明と琵琶——『胡琴教録』と『手習』と——」⁽¹⁾との拙論を發表し、その論において、長明が『胡琴教録』の作者である可能性を推測した。その後、森下要治氏から、拙論における、『胡琴教録』の「師説が語られた時期」の推定と長明作者説は成立しない、との異論が提示された。⁽²⁾そこで本稿では、「師説が語られた時期」について若干の補正を行い、さらに、新たに上巻裏書に見える「筑民部」が誰であるかを比定することによって、改めて長明作者の可能性を述べようと思う。

一

『十訓抄』の「和歌・管絃の道、人に知られたり」の言を俟つまでもなく、長明が管絃の名手であったことは周知のことである。しかし改めて思い致すなら、自ら『方丈記』に管絃の抄物や折琴・繼琵琶の所持、またその演奏を記し、『無名抄』には管絃の師である中原有安から後継者と目されていたことを記す、そのことにどれほど強い矜持を潜ま

せていたかは、我々の想像を超えるものであつたろうと思う。

長明は、九条兼実を除いて、伏見宮旧蔵樂書集成所載の『琵琶血脈』や『文机談』に、唯一人記される有安の琵琶の相承者である。また、『源家長日記』が記す、後鳥羽院が長明から召し上げた長明自作の琵琶「手習」は、『文机談』が記すところ、秘曲尽くしの会の一件によつて院に奉つたものであり、『文机談』はさらに院から琵琶の師定輔に賜つた名物であると記すが、定輔自身の『太上天皇啄木御伝習次第』や、『花山院右大臣記』によつて、院の元久二年六月十八日の啄木御伝習の勅禄として定輔に下賜されたことが判明する。長明には管絃者としての誇りがあつたのであり、それは『家長日記』が記す長明の、「手習」を院に奉つた時の返しの歌が書かれた撥と、「苔の下までおなじところに朽ちはてんずるなり」という発言ほどの執着であつた。

そうした長明の琵琶に対する矜持と、閉鎖的な管絃の相承の実態に鑑みて、中原有安の琵琶の教訓を記し得た『胡琴教録』の作者が誰であるかは興味深い問題であり、その内容の検証から、作者を長明に比定できるのではあるまいか、としたのが前掲の拙論である。その主な理由は、一つには『無名抄』の和歌の師俊恵の長明への教訓と、『胡琴教録』の有安の、弟子作者への教訓が酷似すること。二つには『無名抄』の有安の長明への教訓と、『胡琴教録』の有安の、弟子作者への教訓が酷似すること。これらはともに弟子の能力・性格・境遇を踏まえての教訓であり、かつ記述である。それが酷似することは長明と『胡琴教録』の作者である弟子が同一人物、また両書が同一人物によつて書かれた可能性を推察させる。三つめに、先に石田百合子氏が詳細に検証しておられること⁽⁴⁾でもあるが、『無名抄』と『胡琴教録』が共有する歌論表現、音楽と歌との同質性の認知、通じ合う形態、共有する世界などを認め得ること、などであつた。

さて、前掲の論において筆者は『胡琴教録』の談話・筆録の時期を次のように述べた。『胡琴教録』の師説が語られたのは建久五年以降、老いた有安が遠い筑前に赴いた時点（建久六年三月下旬から没年の建久七・八年以前）を下限とするであろう。これについて森下要治氏は、兼実や師長の官位表記に着目され、例えば兼実について右大将、右大臣、当殿下と表記が異なっていることを示し、「回想の起点となる官職は、いわばその談話が語られ、もしくは筆録された時期をある程度までは示していると考えられよう」とし、建久五年以降に談話・筆録の時期を限定した筆者の説では、「殿下」である兼実しかありえないことになり、筆者の談話・筆録の時期の推定が成立しないことを指摘された。

さらに森下氏自身の見解として、「談話・筆録は兼実の右大将任官直後、すなわち応保元年（一一六一）から遅くとも同辞任の仁安元年（一一六六）までを含み、それ以前に開始されていたと見ておくべきであろう」と述べ、「結局一人の人物が有安の説を三十年程も筆録し続け、かつ編纂に携わったものを見ておく」と述べた。そして氏は、氏の見解による談話・筆録開始時期に七く十二歳であった長明は『胡琴教録』の作者ではないと、長明作者の可能性を否定された。

そこでまず、森下氏が否定された拙論の談話・筆録の時期について私見により訂正を行い、さらに氏の提示された談話・筆録の開始時期について若干の異見を述べることにする。先にも引用した筆者の「師説が語られた時期」、という判断は、氏に指摘されて見直したところ、認識の間違いであったことを認めなければならない。これは厳密に言えば、「師説が語られた時期」ではなく、「師説が語られた時期の下限」、とするべきであった。師説はもっと長期に渡って語られていた。それは長明と有安の師弟関係のすべての時期を含むはずであったのだ。ただ、下限の時期近くに多

く語られたであろう状況の推定根拠は述べたつもりである。

長明と有安の師弟関係の期間について述べる前に、「談話・筆録の時期」という言い方を厳密にしなければならない。談話とその談話を筆録した時期は、『胡琴教録』が作成された時ではない。それについては『胡琴教録』の編纂状態に触れる必要がある。『胡琴教録』は、琵琶に関する教学を体系化する意図によって、内容を整理し、項目を立てて編集したものである。体裁は大きく上巻、下巻に分かれ、項目は上巻が順次、教学琵琶、琵琶体様、調琵琶、取撥、差柱、撥音、諸調子品、十二律調、呂律分別、楽曲、催馬楽、搔合、手、案譜法、師伝相承、下巻が順次、琵琶彈時用意、晴所作、楽屋琵琶、閑御簾前彈、相交管、相交箏、隨時用意、隨所用意、隨調用意、隨琵琶用意、彈玄上用意、雜口伝、提琵琶、置琵琶、治琵琶、懸緒、付柱、押撥面、直惡音、知善惡、琵琶宝物、琵琶名所、縫袋（本文無し）、絃緒（本文無し）となっている。上巻は教学の心得、演奏法、譜の作成、師伝の相承、下巻は、実演の諸条件に応じた諸注意、琵琶の取り扱い、修理法、琵琶の善惡、名器、琵琶の部位の名称などである。基本的知識と演奏法の確認から、実際の場に応じた諸注意・その他へと、体系的な流れをもつて整理されている。

そして各項目の内容は師説（師である有安の説）の引用を中心に形成され、所々に愚案として弟子作者自身の説や、弟子の問とその答えとしての師説、という内容が入る。しかし立てた項目に適切な師説がなかったであろう、上巻の呂律分別と案譜法、下巻の隨時用意の項目は「愚案」のみで形成されている。してみると『胡琴教録』の作成目的は、師説を記録するということと同じくらいの比重で、琵琶の教学を体系化することであったと言える。この編集の仕方は、師説を語られたままに順次筆録して並べたものでは無論ない。師説をすべて整理し、各項目に割り当て方法である。そのためには師弟関係における談話を筆録してあったものを多く用いたであろう。が、そのみとは言い難く、項目に相当する内容を記憶によって書いた部分もありうるものであり、それもない場合は自説で補完しているのである。

さて師の呼称には有安の最晩年の呼称「筑州」（建久五年一月三〇日筑前守補任）が含まれているので、有安の最後まで弟子として有安の説を作者は聞いたはずである。この作者を長明とする時、その師弟関係の期間はどれほどであったかを述べなければならぬ。長明と有安の師弟関係は有安が没するまで続いたわけであるが、ではいつから始まったのであろうか。『無名抄』で確実に分かる年代は、『千載集』に一首入集して喜ぶ長明を有安が讃めつつ教訓している記事である。『千載集』の最初の奏覧のあったのは文治三年、因にこの年、長明は三三歳ほどである。よってこの年以前からの交渉であることは確かである。いつ頃まで遡れるのであろうか。有安は長明に対し「早くみなし子になれり」と言っている。父の死よりは後であるがその直後ではない。長明が父に死なれたのは一八歳もしくはその翌年の頃と推定されるので、それより数年、五、六年経ていると考えられようか。また有安の教訓の語り口は、かなり若い者に対するものであり、ことに歌人として名を立てるより管絃の道の跡を継ぐ者であって欲しいという、長明の人生の選択に及ぶものである。とすれば三十歳過ぎているとは考え難い。二十代の中頃を想定するのが自然ではあるまいか。

その時期について注目されるのは『方丈記』の治承四年の福原新都に関する記述である。「自ヅカラ事ノタヨリアリテ、摂津国ノ今ノ京ニイタレリ。所ノアリサマヲ見ルニ」とある。この長明の行動に着目したのが三木紀人氏と柏崎光政氏である。三木紀人氏は長明の福原行きを政治的行動と見て、ことに、大福光寺本以外の流布本に見える「条理を割るに足らず」という記述が、『玉葉』の、福原に赴いた兼実の「左京条里不足」（治承四年六月十五日条）と類似することを指摘、それを「『玉葉』筆者のような枢要にいた人とその周辺だけが辛うじて知っていた術語」とし、「これをさりげなく用いて、この種の術語を口にした日々をなつかしんでいるのかもしれない」と述べ、また九条家との関係を「中原有安という長明の師匠が、九条兼実の琵琶の先生ですから、何らかの関係があったかもしれませんが」と、有安と長明の関係を推察された⁽⁶⁾。

柏崎光政氏は、三木氏の説を踏まえて、有安と兼実の関係を調査された。この頃にはすでに九条兼実の琵琶の師であつた有安が、兼実のためにしきりに情報活動を行つており、安元二年には兼実から福原の清盛の元に行くよう要請されていること（『玉葉』十一月二十四日条）などを勘案して、「長明の福原への旅の理由として、彼が有安との縁によつて何らかの形で兼実圏の情報活動にかかわりを持ち、福原への『事の便り』とはそのようなことを指すのではないか」と述べられた。⁽⁷⁾

この頃に有安と長明の関係があつたとすれば、この治承四年（一一八〇）は長明二十六歳である。この年以前、先に『無名抄』の記述から想定された二十代中頃と相俟つて、二十代中頃を有安と長明の交流、そして師弟関係の成立の時期と見るのが妥当かと思う。とすれば二人が師弟であつた期間は十五年程の長きに渡ることになるのである。その間に長明は師である有安から、琵琶ないし管絃の教えを受け、その都度書き留めることをしてあつたであろう。あるいは、記憶の中に留めたものも多くあつたであろう、それらを後年整理し、かつ琵琶の教学書として体系化しようとしたなら、それが『胡琴教録』のようなものになつてもなんら不思議ではないであろう。

三

さて森下要治氏は、先にも述べたように、拙論が談話・筆録の時期というものの言いには厳密性を欠いたことで、長明作者説は成立しないと指摘された。今回このように、談話の期間は、二十代中頃、すなわち安元く治承の頃（一一七五く一一八〇）から開始された師弟関係の長きに渡るものであり、後年それを編纂して『胡琴教録』が成立した、と訂正すると、氏の見解における談話の時期の大半が、長明が作者でも可能になる。しかしなお森下氏の説では長明作者説の成立しない部分を残す。氏の「談話・筆録は兼実の右大将任官直後、すなわち応保元年（一一六一）から遅くとも同辞任の仁安元年（一一六六）までを含み、それ以前に開始されていたと見ておくべき」との見解では、その開

始時期に七く十二歳であった長明は、訂正した私見でも作者にはなりえない。

氏が同一人物の官位表記が異なることを指摘されたのは、筆者が看過していたことであった。それが『胡琴教録』の成立と関わるとなると重大なことである。そこで、官位表記で問題となる人物を改めて見直してみたところ、森下氏が指摘する兼実と師長以外には問題となる人物はほばいないと思われた。森下氏の見解においても、成立の問題に関わるのは最終的には九条兼実の官位である。また氏の、官位が回想起点を示すとの見解にはその多くの例に承服でき、貴重な指摘であった。しかし、一方ですべての官位表記が厳密に「回想の起点」「談話が語られ、筆録された時期」を意味するののかという疑問もある。例えば、語った時点に兼実が「右大臣」であったとしても、有安がなんらかの思い入れによって「右大将」と回想して語ったということがなかったと言い切れるのか、ということである。もつとも氏自身が「回想の起点となる官職は、いわばその談話が語られ、もしくは筆録された時期を、ある程度までは示していると考えられよう」と、「ある程度までは」としているのである。そこで、兼実と師長の官位をすべて検証してみよう。

九条兼実（すべて「師説云」の中）

- ① 九条右大臣殿比巴御さたのころ、わが参入の時、ことさら法性寺殿下おほせられていはく、（上・比琶体様）
- ② われ右大臣殿に裏頭樂をしへたてまつる、……しかるに七郎入道資定まいりあひて是をきく、（上・楽曲）
- ③ 右大臣殿にをしへたてまつりし時は、とをくきき、よくよく斟酌して（上・搔合）
- ④ 皇嘉門女院、九条殿下にをしへたてまつります云々、（上・手）
- ⑤ そのかみ殿下のはれの御所作の時は、予かならず参会しき、（下・晴所作）
- ⑥ 玄上をひくべき事あらむには、……ちかくはすなはち九条右大臣殿、ふたたびひかしめ給し時は、さきの日、予衣冠おきて禁中へまいる、へ膠・そくひ・柱木・手拭等相具之、兼日かたりおほせられるるによりて、五位藏人光

雅、これを取りいだす。ただしさきの日、右大臣殿に申して云、……このこと永万元年十一月日也、おほよそ右大臣殿玄上をひかせ給事三ど也、嘉応元年十一月、承安年月日御元服之御あそびにおなじくひかしめまします、
(下・弾玄上用意)

⑦ 右大将殿の御師に参了後、参入法性寺殿、おほせにいはく、大将比巴引になりたれば、かならず可語也、(下・雑口伝)

⑧ 殿下に比巴さづけたてまつりし時は、搔合を弾給しには、(下・雑口伝)

⑨ 殿下おほせにいはく、当世に管絃のかぶとすべき人おほかたなき也、藤中納言〈定能〉こそちうたい也、かつは物よくならひたる人也、(下・雑口伝)

⑩ 当殿下大将御時参内、令弾比巴給之時、(下・比巴宝物)

以上の官位表記を整理すると、①②③⑥が「右大臣殿」、④⑤⑧⑨⑩が「殿下」、⑦のみが「右大将殿」とある。これらを回想の起点と認めるとして、兼実が右大臣であったのは、仁安元年(一一六六)〜文治二年(一一八六)、摂政・関白であったのは文治二年(一一八六)〜建久七年(一一九六)であり、私見が談話・筆録の時期を訂正したことによってこれらは作者が長明であつても可能となる。問題は⑦のみである。しかし、⑦を回想の起点とする必要はないと思われる。ここに「法性寺殿」忠通が登場しており、①と同じ頃であるとは分かる。その時とは、有安が兼実に琵琶を伝授した、有安にとつて忘れ難いエポックメイキングの時であつた。つまり⑦の「右大将殿の御師に参了後」は、回想の起点ではなく、回想されたものの、その時の兼実の官位——忘れ難い時——であつたと解することができるであらう。官位を一律に回想の起点とすることはできないのではあるまいか。

妙音院師長 (②以外は「師説云」の中)

① 太政入道、そのかみ中御門大臣〈宗能〉の家につきて呂律をならひ、(上・教学琵琶)

② 愚案には、大相国禅門御ながれには、比巴をあふぐるやうにもちて、これをひく、(上・琵琶体様)

③ いはゆる四条禅門口説也、(上・取撥)

④ 土左大臣御上路(洛)のとき、四ヶ条のふしむを奉問、(上・諸調子品)

⑤ 太政入道云、件のてう、たゞ師説によるべきか、まさに又かくひやうしにつきてひく、あたらしくふをつくるべきか、御返事つまびらかならず、(上・楽曲)

⑥ 太政入道はふゑのことばのままにふをつくり給へり、(上・楽曲)

⑦ 孝博しなんとする時、でし四条大相国へ師長へおはしまして問云、(上・催馬楽)

⑧ しかるに土左大将御のぼりの時、かの御比巴をきくに、(上・搔合)

⑨ しかるに太政入道殿、そのかみ孝博に比巴をつたへならはしめ給し日、(上・師伝相承)

⑩ 去保元大嘗会に中納言へ師長へこの比巴をひかる、(下・随比巴用意)

⑪ はるこはさは、笛平調之時、巾絃の柱七寸ばかりにたつ程為巧、孝博・四条大相国如此存、(下・裏・箏絃懸事)

⑫ 安徳天皇御むまれの時、七夜に予・惟成等を殿上口にめして、箏・比巴のを、かけしむ、太政入道殿おほせにい
はく、巻絃可仕也云々、(下・裏・箏絃懸事)

以上は、①②③⑤⑥⑨⑫が「太政入道・大相国禅門・四条禅門」、⑦⑪が「四条大相国」、⑩が「中納言」、④が「土左大臣」、⑧が「土左大将」である。それを回想の起点と認めるとして、師長が太政大臣になったのは治承元年(一一七七)、出家したのが治承三年、没したのが建久三年であり、このうち、④⑧⑩以外は長明が作者であつても可能である。もつとも④は「土左大臣」とあるので、これも安元元年(一一七五)に内大臣になって以降であるから、長明が作者であつてもよい。⑩は「去保元」とあり、師長はその年に「権中納言」であり、この例は官位が回想の起点でなく、回想されたものの、その時の官位であることがはっきりしている。残るのは⑧の「土左大将」の問題のみである。

師長が土佐に流されたのは保元元年（一一五六）で、帰洛後、仁安三年（一一六八）から安元三年（一一七七）まで大将であつた。その最後の年の安元三年は長明二十三歳であり、有安との師弟関係が成立していたかどうか微妙な年代である。しかし④の「土左大臣」とともに「土佐に流された」という意識が先行したことで、官位は厳密ではないかも知れないと思わせる。

以上、私見が長明と有安の談話の期間を訂正したことで、長明が作者であつても森下氏の指摘する官位表記が談話・筆録時点であることに大半は整合する。しかしそうでないもの（一応回想の時と認めてみたものの中にもそのいくつかが含まれるかもしれないが）も、官位表記が回想の時を示すという一律の見方を若干改めることによって、長明が作者である可能性に関して、ほぼ問題はなくなるように思う。

四

さて『胡琴教録』の群書類従本、伏見宮本等の形態を見るに、上巻と下巻の最後に「裏書曰」という内容が載っている。これは本来本文紙背の該当箇所分散していたものらしく、下巻のみ残る猪熊本は付箋紙に裏書を写し取つて該当箇所⁽⁸⁾に貼り付けてある。山田孝雄氏によれば、紙背は修補の際の裏打ちで隠され、当該箇所に新たに付箋を貼り付けたものという。

これは巻が成つた後に裏に書き入れたものであるようだ。両巻の「裏書曰」には「追注」という書き方が見え、後から追つて注した体裁になっている。下巻の「裏書曰」の追注が終わると、「箏絃懸事」の項目が見え、あたかも、琵琶が終わつたので、箏について記録しようとしたもの⁽⁸⁾のようである。ここで注目されるのが、上巻裏書の「筑民部」である。次のようにある。

追注、筑民部云、故筑州語云、七郎入道は、一絃より上三寸に麻歌奈比て、一寸よりひく、桂少輔、二絃已上三

寸よりこれをひく、

「筑民部」は誰であろうか。森下要治氏は「筑州とは別人であることが確実だが、その素性は明らかでない」として⁽⁹⁾いる。この裏書の「故筑州」は有安である（有安に対する呼称として『無名抄』と共通する）。有安の説を作者に語る「筑民部」は、有安に極めて近い人物であることは確実である。また有安は建久七年ごろ没しているので、「筑民部」が作者に語ったのは、それ以降ということになる。

ところで有安は「民部丞有保」（『山槐記』応保元年十二月一〇日条）、「民部大夫五位中原有安」（『玉葉』承安三年一〇月二六日条）とある。親の官職は子もまた就任する例が多いことから察するに、そして「筑」という呼称は筑前に縁がある者ということを意味しているであろうから、筑前守になって赴任した有安に同行した者であるらしく、「筑民部」に有安の実子あたりを想定できるであろう。

果たして、それに相当する人物として「民部大夫中原宗安」を探し得る。『明月記』建仁元年八月五日条に次のように登場している。

頭中将、新兵衛佐等、於和歌所可着到之由相議事、達天聽忽被置之、清範書寄人名於其端、民部大夫宗安於内北面作籤、又以家長可為和歌所年預之由、衆議申之、召次一人付此所、如歌合之時、可催人之由等各相議、毎時有勅許、頭中将聊有示告事、

これは前月七月二十七日に和歌所が設置されて間もない記事である。まだその運営に未定の懸案があり、この日、着到（出席名簿）を置くことが決まった。清範が寄人の名を書き、「民部大夫宗安」が籤（札）を作ったのである。なおこの時、家長を年預（開闔）にすることも決まった。この、事務内容からして院の北面であるらしい民部大夫宗安は、中原宗安である。

さて長明はこの頃後鳥羽院の北面となり、和歌所の寄人となった。『源家長日記』に、「うたの事によりきたおもて

へ参り、やがて和歌所のより人になりて後、つねの和歌の会に歌まゐらせなどすれば、まかりいづることもなく、よるひる奉公をこたらず」とある。そして長明が後鳥羽院の歌壇で活躍するこの時期、中原宗安もまた長明と歩を合わせるように院の歌壇に登場する。そして長明が消える時宗安も消えるのである。

宗安が登場する歌合と『明月記』の記事を見よう。

①建仁元年八月三日の「和歌所影供歌合」において、作者三十六人の中に、左方十六人目に「散位従五位下鴨県主長明」、右方十七人目に「散位従五位下中原朝臣宗安」とあり、長明とともに詠出してる。築瀬一雄氏はこれについて「建仁元年八月三日影供歌合の作者に『散位従五位下中原朝臣宗安』がある。有安の子息かとも思ふが、断案を得ない」と述べている。⁽¹⁰⁾

②建仁元年九月十三日の「和歌所影供歌合」において、作者十八人中に、右方七人目に「散位宗安」、八人目に「散位鴨長明」とある。

③『明月記』建仁二年一月十三日条には、

亥時許出御和歌所、内府被仰長房朝臣召歌人、各著座、公卿在長押上如例、奥へ御所同奥、狩御衣へ、内府、冷泉中納言へ隆房へ、大宮宰相中將へ公経へ、端、六条中納言へ公継へ、堀川中納言へ兼宗、束帯、進退有揖へ、大式へ範光へ、新宰相中將へ通具、已上著直衣へ、殿上人在長押下、有家朝臣予在奥、雅経具親在端、具親進之間、直可置和歌之由、内府被命、自座中進置之へ依命也へ、自下臈次第置之、有文台円座、置了召予参進、内府及云被取寄四五通、其残予取之置前、被目新宰相、進寄座後重之、一一被置文台、即読上之、人名如例、各乍三首読上、左兵衛尉秀能、鴨長明、中原宗安、右馬助家長、左兵衛佐具親、左近権少將雅経、定家、有家朝臣、隆信朝臣へ不参有歌へ、通具朝臣、右近中將源朝臣へ通光卿、不参有歌へ、大式藤原朝臣、左近中將藤原朝臣へ公経卿へ、権中納言藤原朝臣へ兼宗卿へ、権中納言藤原朝臣へ公継卿へ、前中納言藤原朝臣へ隆房卿へ、権大納言藤原朝臣へ忠良卿、不

参、へ已上姓以下微音、女歌三枚へ薄様、次被置自歌、内のをほいへ下字ハマギラカシテ微音、読了起退下、新宰相中将坐寄取弘臣下歌、内府被置御製、宰相読了、詠吟之後自下立各退出、⁽¹¹⁾とあり、ここでも和歌所の歌合の、常連の歌人に交じって二人の名が並んで見える。

④『明月記』建仁三年二月二十四日条には、

向大内密見花、一時許帰宅之間、藤少将兵衛佐来招引、又向大内、坐南殿簀子講和歌一首、狂女等擲入謔歌、雜人多見物、講了連歌、少将、兵衛佐、馬助家長、其兄最（寂イ）栄、長明、宗安、兵衛尉景頼、秀能等也、家長取出盃酒、秉燭出大内、家長長明吹横笛、少将筆策、四人相乗帰蓬戸へ四人又乗後車、

とあり、この日は寄人や北面らが大内の花見を楽しんだ。同車した家長と長明は笛を吹き、雅経が筆策を吹いている。他の楽書にも認められるこの三人が、人に許された楽人であることも窺える。この日の記事について、三木紀人氏は中原宗安を「有安の子か」と推測している。⁽¹²⁾

⑤『明月記』建仁三年二月二十五日条には、

仍自敷政宣仁門参東階方、中納言有家朝臣坐東階簀子、参其辺、此間御南階簀子、早可置（進イ）歌曲有仰事、不及作（構イ）思各清書、家長、清範、宣綱へ已上上北面、長明、宗保、景頼、秀能在樹下、即進歌、召予、参上読上、納言読師、一反詠了還御、御製云、

とあり、この大内での歌合にも二人は同席している（宗保は宗安）。

⑥建仁三年六月十六日の「和歌所影供歌合」には作者三十六人中に左方一六人目に「散位鴨長明」、左方一七人目に「散位中原宗安」とある。

以上、宗安が登場するのは常に長明と同席の時である。他の歌人が後鳥羽院歌壇の常連である錚々たる歌人であるのに、ここでの活躍が知られない宗安が登場するのは、おそらく長明の縁によるものであろう。長明は有安の恩に

報いる意思から宗安を北面に推挙し、かつ歌人として引き立ててやったのではあるまいか。かつて長明は有安とともに後白河院の北面であったという縁もある。⁽¹³⁾この後長明のみ建仁三年七月十五日の「八幡若宮撰歌合」に詠出しているが、その後二人とも記録から消えている。長明が鴨河合社祢宜職に就任できなかったことで失踪し、やがて出家してしまったことは『源家長日記』の記すところである。宗安の行方は不明である。両者は極めて親しい関係にあり、宗安は長明と何らか関わって北面を去ったのかも知れない。ともあれ、宗安が有安の子なら歌は詠める。そして無論、長明と親しいはずである。

さて、『胡琴教録』の「筑民部」は中原宗安であろう。そこで二つの可能性が言える。一つは以上に見たように、宗安と長明が親しい間柄であったという事実をもって、その宗安の語りをとどめた『胡琴教録』の作者が長明である可能性が極めて高いものとなるということである。ついにながら、長明は『胡琴教録』の裏書において、有安を『無名抄』におけると同様に「故筑州」と呼び、その子である宗安を、有安の呼称に因んで「筑民部」と呼んだことになる。もう一つは、逆に、おそらく有安の直系は『胡琴教録』の作者ではないということである。『無名抄』に「我子」などをだに、おぼろげならでは教訓する事もなかりしを、か様に後安くいひ教えけるは、又異事にあらず、管絃の道につけて跡継ぐべき物として世に人に数まへられであれかしと思ひけるにこそ」と記した長明であった。有安から後継者とされなかった「我子」こそ、宗安あたりだったわけである。また三木氏や築瀬氏が、宗安を有安の息子ではないかと推測されたが、『胡琴教録』の「筑民部」が宗安であるなら、「故筑州」の言葉を語る宗安は、まさに有安の息子である条件を満たす。

五

ところで、長明の引き立てを推測したが、それにしても後鳥羽院の歌壇で詠出したほどの宗安に、それ以前の詠歌

活動がないのは不思議である。そこで想到するのが『月詣和歌集』の作者である中原定安という人物である。三木紀人氏は、「定安などはその名からすると有安の子らしくもあり、『月詣集』の次の二首を併せ見ると有安の妻（定安の母か）をまじえた親子の構図が浮かび上がってくるかもしれない」と述べるが、その歌とは⁽¹⁴⁾

年ごろぐして侍りけるをんな身まかりて後、山里へまかりける道にむしの鳴きければよめる 中原有安

九七九 道芝の虫は声声すだくなり友なきねをば我のみぞなく

母の身まかりて後、月のあかく侍りけるによめる

中原定安

九八六 ながめこし人はふりにし宿なれど月は昔にかはらざりけり

というものである。『月詣和歌集』に中原定安の歌は他に六七四・七二〇がある。「定」と「宗」の字は似ていなくもない。しかしこれを宗安であると断言するにはまだ至らない。⁽¹⁵⁾ 同人である可能性を指摘するにとどめておこう。

筑民部が宗安であることによつて、もう一つ気になることが解消される。『発心集』巻四―八「或る人、臨終に言わざる遺恨の事」である。「年比、相ひ知る人ありき。過ぎぬる建久のころ、重き病を受けたりける時」とあるこの人物を、三木紀人氏は「有安は『月詣集』十所収の（＊筆注 歌は省略 前出）によつて、妻に先立たれていることが知られるので、本章の主人公の条件に符号する」とし、有安と見なしうることを指摘、さらにその臨終の記述の後に「此の事、遠き程なれば、後に伝へ聞きて、今一度相ひ見ずなりぬる事を口惜しく思ひける程に」とあることについて、「有安だとすれば、彼は筑前守を最終官として死んだので、あるいは、この『遠き程』は筑前をさすか」と推測される。⁽¹⁶⁾

この話には有安と推定される人物の臨終のさまが詳細に記される。現実には、有安臨終時の詳細を長明に語ることのできた人物がいた。その人物こそ、有安と共に筑前に下っていたからであろう、『胡琴教録』の作者から「筑民部」と呼ばれる中原宗安である。

さて、『胡琴教録』が長明の作とすれば、長明はそれをまず誰よりも、裏書に名が見える「筑民部」こと中原宗安（彼が長明より先に死ぬなどということがないかぎり）に、見せるなり、伝えるなりしたと考えられるであろう。現存する『胡琴教録』の祖本を所持していたことが知られるのは、有安の養子である景安の子、中原光氏である。すなわち『胡琴教録』の奥書に「以左近大夫将監中原光氏之秘本令書写之、秘書之間、荒涼之人有其憚、仍以女性令書之間、僻字等多、得其意追可書改之」とある。光氏は、鶴岡の舞樂院に奉安された弁財天像に光氏の文永三年造立の銘があることや、『吾妻鏡』および『弘安四年鶴岡八幡遷宮記』などから鶴岡八幡宮の樂人として活躍したこと、また逗子市神武寺の弥勒菩薩像の銘から正応三年に七十三歳で没したこと、また舞と神樂に秀でていたことが知られる。⁽¹⁷⁾なお生年は長明の没した二年後、建保六年であった。『胡琴教録』が光氏に伝えられた経緯は、おそらく宗安から景安へ、そして光氏へという流れだったのではないだろうか。

ところで、『胡琴教録』の作者を、山田孝雄氏はこの光氏の父である景安かと推定されている。⁽¹⁸⁾しかし、琵琶の相承について語る『文机談』は、有安から長明への相承は記しても、景安への相承は記していない。景安はもと吉備津宮の神官の子で笛にすぐれ、有安が養子にして「笛もうち物もよくよくつたへけり」だったと記す。景安は『教訓抄』卷十には承久四年二月二八日、醍醐童舞御覧の折に太鼓を担当していることが見え、笛については『吉野吉水院樂書』と『絲竹口伝』の「五常樂の急」に見えるが、琵琶の奏者としての記録はない。また有安が養子にしたのがいつであるかは不明だが、元服してまもない頃だったとあり、『樂所補任』嘉祿元年に「中原景康 下向関東、為鎌倉一者」とあることや『文机談』の記事から、後年鎌倉に下って活躍したことが知られるので、長明などよりはかなり年齢が若いと推定される。よって先の森下要治氏の談話・筆録の時期の指摘からも、景安が『胡琴教録』の作者である可能性はないだろう。

おわりに

以前ものした拙論における長明の『胡琴教録』作者説は、状況証拠的な推論であった。しかし、この度、『胡琴教録』の裏書に追注された「筑民部」を、民部大夫中原宗安に比定し得たことにより、宗安と親しく、おそらく彼を引き立ててやった鴨長明こそ、やはり『胡琴教録』の作者その人である可能性が一段と強くなったと思う。筑民部が中原宗安であることをもって、『胡琴教録』長明作者説の一傍証としたい。

注

* 『胡琴教録』の翻刻には群書類従本（群書類従巻第三百四十四）および伏見宮本（図書寮叢刊『伏見宮旧蔵楽書集成 二』平成七年）があり、複製に猪熊本（古典保存会『胡琴教録 下』昭和一七年）がある。本稿では伏見宮本をテキストに用い、任意に濁点を施した。

- (1) 『国語と国文学』平成四・三
- (2) 「胡琴教録の基礎的問題―成立時期・編者・編纂態度―」『国文学攷』平成五・一二
- (3) 兼実は『玉葉』（建久五年二月二十七日条他）、『胡琴教録』、群書類従『琵琶血脈』などにより、有安を師としたことが知られる。
- (4) 「さしのきて聞くには花なくて下賤し―胡琴教録の師説―」『上智大学国文学紀要』昭和五九・二、「仮令村濃の匂ひの如し―胡琴教録の語彙と表現―」『上智大学国文学紀要』昭和六一・一
- (5) 「情念の論―長明の福原往還とその表現―」『国文学』昭和四九・一二
- (6) 「長明」『中世の隠者文学』学生社、昭和五一
- (7) 「鴨長明と政治―中原有安を通して―」『明治大学大学院紀要』昭和五一・一二
- (8) 『胡琴教録 下』解説、古典保存会、昭和一七年
- (9) 「胡琴教録人物覚書」『広島大学文学部紀要』平成七・一二
- (10) 「中原有安覚書」『鴨長明研究』加藤中道館、昭和五五
- (11) 『明月記抄出』によって不審箇所を二箇所ほど訂正した。

- (12) 『鴨長明』新典社、昭和五九、同、講談社学術文庫、平成七
- (13) 『後白河院北面歴名』、『水荃』(平成元・三)に翻刻。
- (14) (12)に同じ。
- (15) 写本を調査しているが、三手文庫本、彰考館本、鹿児島大学附属図書館玉里文庫本などの写本、および神宮文庫本などの刊本等、近世のものには「定安」とある。ただしこれらは九七九・九八六の歌を含む部分を欠く。
- (16) 新潮日本古典集成『方丈記 発心集』、該当説話の頭注。
- (17) 福島和夫『日本音楽大事典』(光氏の項)平凡社、平成元、貫達人『鶴岡八幡宮寺』有隣新書、平成八
- (18) (8)に同じ。